

16世紀ルッカの「異端者」たち—イタリアにおける宗教改革と人文主義—

高津 美和（早稲田大学大学院博士後期課程）

16世紀前半にアルプス以北で生じた宗教改革の影響は、イタリアにも波及した。しかし、ドイツやスイスとは異なり、イタリアでは近世を通じてカトリック以外の宗派が公認されることはなかった。そのため、イタリアにおける宗教改革の受容については、長い間ほとんど研究されてこなかった。しかし、1939年に発表された、デリオ・カンティモーリの『16世紀イタリアの異端者たち』は、「対抗宗教改革」の過程で抑圧の対象とされた「異端者」たちを取り上げることによって、カトリック一色ではない多彩なイタリアの宗教的状況を描き出した。このカンティモーリの研究は、16世紀イタリア宗教史研究の一つの有力な流れを形成し、現在まで受け継がれている。彼の後継者たちによって、個々の「異端者」の思想研究が深められるとともに、「異端者」の存在を歴史の表面に登場させた制度的な装置である、禁書目録や異端審問所についても研究が進められた。さらに、「対抗宗教改革」期だけではなく、それ以前の時期におけるイタリアの宗教的状況にも関心が向けられるようになってきた。これらの成果を取り入れて、近年では、サルヴァトーレ・カーポネットやマッシモ・フィルボが、16世紀イタリアの宗教的状況を総括する研究を発表している。そして彼らは、カンティモーリやその後継者たち以上に、プロテスタント思想のイタリアにおける影響を高く評価している。

しかし、イタリアの「異端者」たちの中には、プロテスタントの思想の影響を強く受けていたにせよ、カトリックかプロテスタントかという宗派的な枠組みに収まりきらない人々が存在したことも事実である。既に述べたように、イタリアでは公にはカトリック以外の宗派が存在しなかったのであり、そうした状況で、「異端者」たちのプロテスタントという信仰共同体に対する帰属意識は希薄であったように思われる。また、イタリアの「異端者」たちは、最初から「異端者」であったわけではない。彼らと都市・共同体との関係が、内的・外的な要因によって変化するに応じて、彼らは「異端者」となったのである。近年のイタリア・プロテスタント研究には、こうした関係性の変化、すなわち、「異端者」が「異端者」となる過程に対する視点が欠如しているように思われる。

この過程を解明するためには、第一に、都市のような共同体における彼らの活動の実態を明らかにし、第二に、その共同体内外の諸権力との関係について考察する必要がある。本報告では、この二つの問題について論じるために、16世紀のイタリアにおいて、最も「異端に感染した都市」と見なされたルッカの事例を取り上げる。トスカーナ北西部に位置するルッカは、中世以来、絹織物業や銀行業が発達し、フランス、ドイツ、スイスとの交易が盛んであった。こうした交易による人の移動と共に、アルプス以北の宗教改革者たちの思想がルッカに流入した。その新しい思想は、都市の内部において、書籍に加え、説教、学校、人文主義サークルといった経路を通じて普及した。当時の書簡や報告書によると、ルッカの「異端」は、ローマ異端審問所の再編（1542年）を促す要因と見なされている。また、16世紀後半には、ルッカの多くの有力家族がジュネーヴへ亡命しており、イタリア

の他都市には見られないこうした現象からも、ルッカへの「異端」の浸透はとりわけ著しいものであったことがわかる。本報告では、こうした16世紀のルッカにおける、ピエトロ・マルティーレ・ヴェルミーリとアオニオ・パレアリオという二人の「異端者」の活動を検討する。具体的には、彼らの人文主義的教育活動の実態を明らかにするとともに、彼らの亡命の背景、すなわち、「異端者」の信仰をめぐる、都市当局・教会組織（教皇庁、ルッカ司教、諸修道会）の協調・対抗関係について考察する。

フィレンツェ出身のアウグスティヌス会士ピエトロ・マルティーレ・ヴェルミーリは、1541年、ルッカのサン・フレディアーノ修道院長に赴任した。当時、サン・フレディアーノの修道士が不倫事件などのスキャンダルを起こし、修道院に対する市民の信頼は大きく揺らいでいた。この状況に対し、ヴェルミーリは、修道士たちを神学者として鍛え直すことによって、彼らの意識を改革しようとした。彼は、修道士たちが、最良の方法で、ラテン語、ギリシャ語、ヘブライ語を習得できるようにするため、それぞれの教授に最適と思われる人々を招聘した。そして、特筆すべきことに、このサン・フレディアーノでの教育は、修道士だけではなくルッカの世俗の人々にも開かれており、彼らは、修道院で行われる説教や講義に通った。そうした例として、人文主義者のチェリオ・セコンド・クリオーネや、フランチェスコ・ロベルテッロなどが挙げられる。しかし、やがて、ローマ教皇庁は、1542年に異端審問所を再編して異端抑圧政策に乗り出し、ルッカにおけるヴェルミーリの活動に警戒の目を向けた。ルッカを訪れる以前に滞在したナポリで、スペイン人の思想家ファン・デ・バルデスと交流があったヴェルミーリは、ローマの追及を恐れ、1542年8月にアルプス以北へ亡命した。バルデスは、イタリアにおいて、エラスムスの人文主義とルターやカルヴァンの宗教改革思想の普及に大きな貢献を果たしたといわれる人物である。ローマの異端抑圧政策が始まったこの頃から、バルデスの影響を受けたイタリアの知識人たちの亡命が始まった。ヴェルミーリも、こうした知識人たちの一人であったのである。

サン・フレディアーノ修道院で行われた教育は、高等教育を望む市民にとっても魅力あるものだったと思われる。ルッカでは、大学を設立しようとする動きが皆無だったわけではないが、近郊にピサ大学が存在したことも関係して、自前の大学はほとんど機能しなかったからである。ヴェルミーリ亡命後の1545年、ルッカの学校局は、既存の二つのレベルの学校に加えて、上級学校を設立した。そして、この上級学校で行われる高等教育で中心的な役割を果たしたのが、ヴェローリ出身の人文主義者アオニオ・パレアリオであった。

パレアリオは、ルッカに招聘される以前、シエナで異端として告発された過去を持っている。また、彼の著作や書簡には、エラスムス、ルター、メランヒトンなどを擁護する記述が見出され、彼がアルプス以北の人文主義・宗教改革思想の影響を受けていたことは明らかである。ルッカの都市政府が、こうした危険な思想的傾向を持つ人物を教師として招聘したことは興味深い。既に述べたように、ローマ教皇庁は、1542年以降、異端に対する抑圧政策を開始し、その政策の一環として、ルッカに異端審問所の法廷を設置しようとした。これに対し、ルッカは自ら、一定の抑圧的な宗教政策を講じることによって、ローマ教皇庁からの圧力を回避しようとしたように思われる。たとえば、1545年に、異端審問所に代わる都市独自の機関として、宗教局を設置している。しかし、この時期を通じて、パレアリオとその支持者たちは、異端として宗教局から告発されることはなかった。この背景には、彼らの思想に共鳴するアンツィアーニ、すなわち、都市の指導層の存在があった

と思われる。

しかし、1549年9月、教皇は、ルッカにおけるドミニコ会の修道院サン・ロマーノの修道士の協力の下に、都市に異端審問所を設立しようとする旨の勅書を出した。これに対して、ルッカは、1545年の宗教局設置の際の条令にいくつか修正を加えて、異端対策の姿勢をアピールし、再び異端審問所法廷の設置を回避した。しかし、同じ1549年に、アレッサンドロ・グイディッチョーニがルッカ司教に就任すると、ルッカに対する教皇庁の圧力が、一層強まることとなった。アレッサンドロは、ルッカの異端的な状況を教皇庁に告発し、市内の異端問題に介入し、これを積極的に抑圧する必要性を訴えた。そして、1555年に、教皇庁から介入の権威を付与する勅書を得た。こうして、教皇庁からの圧力が強まると、とりわけ1555年以降には、パレアリオのような個人だけではなく、多くの有力者が家族単位で、ルッカを離れ、ジュネーヴへの亡命を始めた。そして、同時期に、ルッカでは、さらなる異端取り締まり政策が提起された。ジュネーヴへ亡命した市民とのコンタクトに関する規制や、禁書や検閲の制度が設けられている。これらの政策を経て、16世紀末には、ルッカは「対抗宗教改革の都市」の外観を整えていった。

こうした対抗宗教改革の影響は、ルッカにおける教育の状態にも投影された。パレアリオが都市を去った後、公立の学校は次第に衰退していった。そしてこの後、都市の教育にイエズス会が介入しようという動きが見られる。1581年には、ルッカにおけるイエズス会のコレギウム設立の議論が起こっている。

以上、本報告では、ルッカの「異端者」たちの教育活動の実態とその知的・宗教的影響力、さらにそれをめぐる都市内外の諸勢力の動向について概観した。そして、「異端者」たちが、都市の人文主義的教育活動の発展に寄与すると同時に、彼らが都市の教育の場を拠点として、その宗教改革的思想を市内に浸透させていたことを明らかにした。都市の教育政策は、こうした「異端者」に対する都市内外の諸勢力の宗教政策に左右された。都市当局―教皇庁の争いを軸に、ルッカ司教、アウグスティヌス会、ドミニコ会、後にはイエズス会も加わった主導権争いの中で、都市の「異端者」への対応は、都市の政治エリートの共感あるいは「寛容」から、1542年のローマ異端審問所再編に対抗する「自主的な抑圧」、次いで1555年に、教皇庁、より具体的には、ルッカ司教、ドミニコ会、さらにはイエズス会の強い影響下における「より強い抑圧」へと変化していった。この変化に応じて、ヴェルミーリやパレアリオら「異端者」を担い手とする都市の人文主義的教育活動は、その政策的変更を迫られ、最終的に、その可能性を絶たれることとなったのである。

参考文献

S.Adorni Braccesi, *“Una città infetta”: La Repubblica di Lucca nella crisi religiosa del Cinquecento*, Firenze, 1994.

— “Il dissenso religioso nel contesto urbano lucchese della Controriforma”, *Città italiane del’500 tra Riforma e Controriforma*, Lucca, 1988.

— “Maestri e scuole nella Repubblica di Lucca tra Riforma e Controriforma” *Società e Storia*, 33, 1986.

M.Berengo, *Nobili e mercanti nella Lucca del Cinquecento*, 1965(1974).

M.E.Bratchel, *Lucca 1430-1494: The reconstruction of an Italian city-republic*, Oxford,

- 1995.
- G.K.Brown, *Italy and the Reformation to 1550*, Oxford, 1933.
- D.Cantimori, *Eretici italiani del Cinquecento. Ricerche e storiche*, Firenze, 1939(2002).
— *Ginevra e l'Italia: raccolta di studi*, Firenze, 1959.
- S.Caponetto, *Aonio Paleario(1503-1570) e la Riforma protestante in Toscana*, Torino, 1979.
— *La Riforma protestante nell'Italia del Cinquecento*, Torino, 1997(1992).
- M.Firpo, *Riforma protestante ed eresie nell'Italia del Cinquecento*, Roma-Bari, 1993(2004).
- A.Mancini, *Storia di Lucca*, Firenze, 1950.
- J.C.McLelland, *Peter Martyr Vermigli and Italian Reform*, Warterloo, 1980.
- P.McNair, *Peter Martyr in Italy: An Anatomy of Apostasy*, Oxford, 1967.
- E.W.Monter, "The Italians in Geneva 1550-1600: A new look", *Genève et l'Italie*, Genève, 1969.
- A.Pascal, *Da Lucca a Ginevra: Studi sull'emigrazione religiosa lucchese a Ginevra*, Pinerolo, 1935.
- A.Prosperti, *Tribunale della coscienza: Inquisitori, confessori, missionari*, Torino, 1996.
- F.Tocchini, "I rapporti fra lo stato e la chiesa a Lucca nei secoli X VI — X VIII: Le istituzioni", *Rassegna degli Archivi di Stato*, 36, 1976.
- G.Tommasi, *Sommario della Storia di Lucca*, Firenze, 1969.